

く接したことである。

紙の加工は、紙に文字を書くことが始まったときから行われたと考えられている。紙面を平滑にして書き易くすることから始められた。仏典のごとく紙数の多くなった場合には、紙を染め上げて色を均一する方法がとられるようになった。黄蘗などでもって黄色に染める理由については、防虫の意味があったと『雲仙雜記』を引いて小杉放庵が述べていたことがある。書き易い料紙を求めて、様々な工夫が凝らされてきたが、この工夫の跡をたどって、わが国に伝えられた麻紙は書きにくい故に草書の文字がおこなわれるとその姿を史上から消してしまったという意見がある。麻紙が史上からその姿を消してしまった理由について私見を述べておいたごとく、仏典と他の料紙との使い分け、写経の形態に変化があったことを認めたことである。奈良時代の一切経写経の料紙は、文献にみられる如くその多くが麻紙であった。ことに、勅願経の料紙はみごとに紙で、願文を識語に記されているものもすくなくない。が、しかし注意深く観察するとき、時折、識語のみが鎌倉時代に料紙とともに補われているものに接することがある。その部分のみ紙の原料や抄紙の技術がまったく異なるからである。また、天平写経の名をもって市井に伝えられている経巻のなかにも、料紙の点から観察した場合、ただちに背首できないものにもまま遭遇することがあった。留意すべき事柄であると思う。

この稿を草するにあたって、滋賀県大般若經調査員の各位をはじめ高知県紙業試験所の宮地龜好氏・土佐紙業の池加津夫氏の協力をうけた。記して、謝意を表したい。

(本学助教 図書館学)

意志の有限性について

西井元昭

有限とか無限とかいう概念は時間や空間のイメージから想像されたり、数の概念から類推されたものである。私たちが有限や無限をとり挙げる場合には、それは数における有限・無限でもなく、また時空間における有限・無限でもなくて、どちらかと言えば意味としての有限・無限であると考えられる。

そこで意志について簡単に言うとしたら、私たちは日常的なあらゆる行為乃至言動によって自分の意志を表明したことになるということである。しかし、私たちの行為や行動は必ずしも常に意識的や意図的なものばかりとは限らない。無意識的な行為、情性的な行為、習慣的な行為、欲望を満たす行為等々、どちらかと言えば非意志的な行為も日常的に数多く見られる。私たちの行為がすべて自分の意志によって統御され自分の意識的乃至理性的判断に基づいて為されているとは断定し得ない。自分の意に反して、また心ならずも、或は余儀なく為さざるを得ない行為・行動も存在し得る。更には、自分の意の通りに物事を行うことの出来ない場合もあるであろう。その際、意志には一種の抵抗と努力とが要請される。その他、抑制もまた意志の重要な働きである。自制、心の葛藤からの脱出、抑圧感情の克服など、意志の力を必要とする場合が数多くあることに私たちは気付くのである。それでも尚意志の力の及ばないものがあるとしたら、それを一種の必然性として納得し、それに同意すること、即ち自分の力の限界を認

めることも意志の作用の一種であるであろう。そこに意志の自由と必然性の問題が生じてくるのである。

ところで、意志に無限性を認めようとするなら、意識の志向性のうちに無限を垣間見る以外にはそれを認めることが出来ないのではなからうか。その場合、意識作用としての意図的なものは、人間の生、つまり何ものかを欲し、何ものかを目指す生の限りなき欲求によって、志向性に基づく意識作用が果てしなく繰り返されるが故に、無限な働きを有すると見做されるのであろう。我々が生存のうちに無限な意志の働き或は意識作用を伴って存在するものであるという点において、私たちの意志は限りなく未来へと開かれているのである。しかし、その無限は飽くまで可能性としての無限、もしそう言っても差し支えなければ可能的無限であって、かかる無限を可能にするものは意志の決断による実存の絶えざる投企なのである。従って、人間の無限の可能性というのは私たちが意志の投企的決意によって開かれるべき未来を目標としているという意味のことを指していることにならう。

ひるがえって、意志とは本来、意識的或は計画的な、自発的或は自由選択的な意志のことを指すのであるが、同時に欲求に基づく意欲もまた広義の意志に含まれるものである。それら意志の発動による行為の動因乃至動機は極めて多様であって、それによって意志と意欲とを識別するような行動の動機を画的に区分することは甚だ困難である。その上行行為の手段と目的との関係も複雑に絡み合ってくる。意志の発動というものは意識が身体を巻き添えにすることによって遂行されるのであるから、生の営みとしての行為乃至行動は、一方では意志的な働きによると同時に、他方では非意志的な働きによるものでもある。そこには意識の自発性

が存在するばかりではなく、身体の自発性も存在するということを私達は見逃してはならないであろう。この身体の自発性の根拠には身体に備わった幾つかの徴候が見られるのである。

先ず第一には、予め形成されている技とでも言うべきものが身体に備わっているということである。その一つは、身体が身を守る術を会得して、身の危険に対し自動的に予め防御姿勢をとり、その危険を避けたりそれから逃避したりする姿勢をとったり、そういった外庄に対して抵抗したりし得るということである。それにも拘らず、もう一つは、自分の内的及び外的な情況或は条件に対する適応性や順応性を身体が備えているということである。そのことから、三つめは、身体が観念運動的反射とか模倣とかを為し得るし、また何ものかを無意図的に探索したり探求したりしようとする能力を有しているということなのである。

第二には、情動のうちの特に不意の出来事に対する驚嘆乃至感嘆が、他の諸々の情念に先立って、身体の基本的な情意的自発性の能力であると考えられる点である。驚嘆は単に外的や内的な偶発事によって驚かされるという受動的な感情にとどまるものではなく、それは身体の有し得る諸々の感情の基本的な態度としての驚嘆し得る能力を意味しているのである。従って、驚嘆とは単なる感受性の一つと見做されるのではなくて、自発的な身体能力、つまり身体のもつ非意志的な働きの一つなのである。身体の自発性の根拠のうちにこの感嘆し得る能力乃至驚嘆し得る能力が重要な位置を占めていると考えられよう。

第三には、習慣もまた身体の自発性の根拠となり得る。身体は知らず知らずのうちに習慣を身につけていて、その習慣によって意志が発動され私たちを行動へと駆り立てるものである。習慣は

自然的ではあるが、惰性的・盲目的に私たちを或る行為に向かわせる意志の受動化・意志の奴隸化の基ではない。人間の習慣は必ずと身につくべきものであり、決して意志の自発性を損うものではなく、性格と同様身体の自発性を發揮させる人間の基本的な原動力の一つであると見做されるのである。

第四には、性格も習慣と同様に自分の気付かない間に身体内部に作り上げられていっているということである。日本では習性となるという諺があり、フランスでも習慣は第二の性質であるという格言がある。性格を性は性質、格は人格と分けて考え、前者を先天的並びに後天的に自ずから身についたもの、後者を自分が形成して作り上げたものと見做すことも出来ようが、いずれにせよ身体に備わった一種の能力であると考えられる。私達は通常、表に現われた日常的な生活態度、仕事上の姿勢、対人関係における言動などあらゆる人間的な行為を通して他者の性格を推し計るものであり、一方自分の性格は一種の反省的な自己診断・自己省察によるか、自分の行為の結末から自己の性格を判定することによって明らかにされるものである。しかし、自分の性格を変えるということは極めて困難であることは誰も認めるところである。自己と自分の性格とはもともと不可分の関係にあり、自分の性格を変えるというのとはや自分でではなくなること、つまり他者になることに他ならない。そして、自分の性格は身体の自発性による自分の意志の発動に大きな影響力を發揮するばかりではなく、それは身体の自発性そのものの基礎であり原動力でもあるであろう。性格は意識の内部よりも身体の内部に深く根付いているばかりではなく、それは心身結合の中心に座を占めている。私の性格は私と切っても切れない間柄にあり、他者の模倣を許さない私の

独自性、否私自身でもあるのだ。この如何とも為し得ない私の性格は私という存在の核心を為している。従って、性格もまた身体の自発性の根拠としての重要な位置を占めていることになるのである。

第五には、身体の自発性の根拠の一つに挙げられるものに無意識がある。無意識が意識の自発性の根拠であるはずがなく、たとえそれが意識の奥底に隠されたもので前意識または下意識のようなものであっても、意識されていない状態である以上それが意識の自発性の根拠であるとは言い得ない。それに反して身体においては諸々の非意志的な働きを見ることが出来、意識されることなく身体を動かすように仕向けるものが存在するとしたら、それを無意識とでも言わざるを得ないであろう。従って、このような非意志的な働きとしての無意識的行為は、身体の自発性によってこそ遂行され得るのである。それは非意志的なものが一種の意志表示として発動される行為なのであろう。そこに身体の自発性の根拠がある。

第六には、最後に生が身体の自発性の根拠となり得る。生は、一方においては必然性によって、他方においては偶然性によって営まれるものである。生は常に必然性と偶然性の谷間に弄ばれながら、その偶然性を拒否しようとする。生は必然性に合体しようとする。けれども生は完全に偶然性から脱出することが出来ない。波間に漂う小舟のように生は必然性と偶然性の間を行きつ戻りつしながら、いずこへ流されていくのやら皆自分からないうちに、どこか名も知らぬ小島に辿りつくことになる。ただ身体だけが生を繋ぎとめ、身体の自発性が生命を支え、身体が死への旅路を共に歩んでくれているのである。それは一面からは死への病と

見られるかも知れないが、他面では死への希望と見られなくもない。身体はこの生の偶然性を必然性へと導く船、否、水先案内の役割を演じてくれている。つまり、身体の自発性はいかかるとも偶然性から生の必然性へと誘導する船長の役割でもあるのだ。それ故、生の営みこそ身体の自発性の最も基本的な根拠なのである。

ところで、常識的には、身体はあらゆる外的な刺激や影響を受け易く、ストレートにそれに反応するが故に、意志の自由にとって有害であり、選択の自由を阻害するように思われている。しかし、もしこの身体がなかったら、意志は何らかの妨害に会った場合、それを拒否しそれに抵抗する手段、また自分のあらゆる障害を乗り越えようとする努力を為す手段をどうして得ることが出来るようか。そして、もし身体がなかったら、かかる拒否や抵抗を経るのち、意志は最終的に必然性に適合しそれに同意することがどうして出来るのであろうか。それは意志の自由の放棄に繋がるものである。身体を排除した意識は、古典的な靈魂が無限の空間の永遠の沈黙のなかを飛翔したり、古典的な形而上学的アイデアが固定的観念としてのイデオラに変身するように、その生命を失いその本質的な志向性さえ失われてしまうのである。偶像化され理念化された純粹意識には意志などにも見当たらないであらう。意志は生きている、つまり身体をもった人間の意志であって、単なる理性的存在者という理念的存在の意志ではないのである。意志は身体を通して拒否もすれば抵抗もするし、努力もすれば中断乃至休息もするし、また適応もすれば順応もする。意志は一種の行動の図式のうちでしか表示され得ない。それなるが故に、意志は一定のペースベクトルのなかで、何らかのコンテキストによって発動されるのであろう。しかし、意志がこの地平を超えては働

き得ない以上、意志は有限であると考えられねばならない。意志の有限性の根拠が身体の受動的性格にあるというのは当を得ていない。意識の自発性にしろ身体の自発性にしろ、人間の意志はその行動の射程距離の範囲内でしか発動され得ないが故に、有限なのである。一般に無限の可能性ということがよく言われているが、これは、勿論カント的な可能的経験のように経験を可能にする制約の下で、つまり悟性法則によって可能になるような経験の可能性ではなく、何にでもなり得るといふ可能性、つまり能力の可能性が無限であるということであり、その意味で非現実的ではあるが未来への投企的蓋然性としての可能性が無限であるということであらう。この無限とは未来の先取り、未来の現実化の不可能性をも意味していよう。それだからこそ未来への投企が可能なのである。それは一種の意志決定乃至決意・決断によって開かれるべき未来という意味を含んでいる。従って、非現実の無限の可能性は現実の無限の不可能性をも含意しているのである。要するに意志の有限性は、未来への投企を意味する意識並びに身体の志向性によって、その可能的行為は無限であっても、その現実的行為は有限であることを物語っているのである。

(本学教授 哲学)